

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

* 乾板保持台を収蔵

1986年のハレー彗星回帰の際、三鷹の65 cm屈折望遠鏡で撮影されたハレー彗星を撮影した写真乾板をデジタルデータとして取り込む作業を行ったことがきっかけになり、その写真撮影を行った畑中至純氏からいくつかの貴重なものをいただくことになった。

その一つが今回の乾板支持台（写真1）である。



写真1

もはや、写真乾板は新しい撮像素子に駆逐されてしまったが、天体の直接写真、分光器によるスペクトル写真はつい30年ほど前まではガラスに感光材が塗布された写真乾板が使われていた。今回、収蔵した乾板支持台は暗室で使われたものではなく、写真乾板の測定時に乾板を安全に置いておく支持台として使われたものである。この台1個で12枚の写真乾板が置けるように溝がある。実際に乾板を立てかけて使用した状態を撮影したものが写真2である。

写真乾板の整理などで、ガラス製の写真乾板を安全に置いておくには便利なものなので、今後も活躍の場があるので、博物館の収蔵品ではあるが、動態保存として活用したいと思っている。この乾板支持台には底板がないので暗室で水切りの台としても使えるが、新たに暗室でガラス乾板の現像が行われることはもはやないであろう。この支持台は畑中氏の特注で製作されたもので、乾板の安全のために非常に頑丈に作られている。

暗室で乾板の水切りに用いられていた一般的なものはもっと簡便なものであった(写真3)。今の読者には全く縁のないものであろうが、実際に写真乾板を使っていた時代を経た筆者にとっては馴染みのものである。



写真2 実際に写真乾板を載せた状態



写真3 筆者などにはなじみの暗室で水切りに使ったもの

写真3の乾板の水切り台は、太陽塔望遠鏡の暗室に残されたものである。国立天文台で暗室が残っているのは太陽塔望遠鏡だけであろう。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp